



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第30主日 B年 (2021年10月24日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 31章7—9節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 5章1—6節

福音朗読：マルコによる福音書 10章46—52節

テーマ：^{みち} ^{すす} ^{したが}
なおも道を進まれるイエスに従う

三つの朗読から

バビロン捕囚（紀元前586年）のあたりまで預言者エレミアは活動しました。今日の朗読箇所を含む『エレミヤ書』30—33章では、捕囚の民が故郷へと帰ってくることに、イスラエル民族の再興が約束されます。そこで、この箇所は「慰めの書」と呼ばれてきました。30章ではイスラエル（北王国）とユダ（南王国）が再び栄えることが約束されます。31章では、イスラエルを復興する残りの者の帰還と、イスラエルと結ぶ新しい契約が約束されています。

第二朗読を味わう上で知っておく必要があるのは、旧約の祭司はアロンの系図につながる者だけだったという事実です。その中から大祭司が一人選ばれ、彼だけが神殿の最も奥にある至聖所に入ることができました。大祭司は年に一度、贖罪の日（つみ）に罪のゆるしを受けるために動物の血を携えて至聖所に入ったのです。大祭司の主な務めは「供え物やいけにえを献げる」ことでした。「供え物」とは、あらゆる種類の犠牲を表しますが、「供え物といけにえ」となると、前者は屠りを伴わない献げ物一切、後者は屠りを伴う献げ物一切を表します。

人間から選ばれた大祭司ですから、「自分自身の弱さを身にまとい」ています。それは罪に至る弱さであり、罪ゆえの弱さでもあります。2節にある「思いやる」（メトリオパテイン）は、もともとヘレニズムの哲学用語だったそうです。隣人の罪を無関心に見過ごすこともせず、かといって感情の赴くままに行動するわけでもない、真の中庸、態度を保ちながら同情するという態度です。

大祭司の特徴は「献げ物をする」、「思いやることができる」、「神から召された」です。これをイエスさまにあてはめています。5節では大祭司であるイエスさまは、神さまからその身分を受けたことが証明されます。

福音朗読は、8章21節でのイエスさまの呼びかけ「まだ悟らないのか」にこたへる形で二度繰り返される盲人の開眼の物語(8章22—26節と10章46—52節)に挟まれて三度にわたって告げられる受難告知という大きな枠組みの中の最後の部分です。どの受難告知にも「その途中」という言葉があります。つまり、イエスさまがエルサレムへの道を歩んでいく中で、お弟子さんたちに受難が予告され、お弟子さんたちはそれが理解できず、イエスさまはお弟子さんたちに教育をほどこします。興味深いことに今日の福音朗読の後ではイエスさまによる奇跡物語もなくなりますし、イエスさまに従う物語もなくなります。そうしますと、盲人の開眼のエピソードは、単に目が見えるようになったという意味だけではないことが分かります。心の目が開かれて、イエスさま、それも十字架への道を歩むイエスさまが分かるようになるのです。こうして、イエスさまとお弟子さんたち一行は(そして、福音書の読み手であるわたしたちは)エルサレムへの道を進むのです。

説教

エルサレムへ向かう道は坂道です。ですので、エルサレムへ上ると今でも表現します。イエスさまとお弟子さんたち一行は長い坂を上りながらエルサレムへと向かいます。今日はエリコの町の道端での出来事です。バルティマイという目の不自由な人は道端に座っていました。いつもそこに座って物乞いをしていたのかもしれませんが、エリコに到着したイエスさま一行の話聞きつけて、町の外へと通じる門のところでイエスさまを待ち受けていたのかもしれませんが。「わたしを憐れんでください」(47、48節)は彼の切なる願いです。そして、イエスさまに対して「目が見えるようになりたいのです」(51節)と自分の願いを直接伝えます。ここにこの男のイエスさまへの信頼感が表れています。

なぜこの男は目が見えるようにならなかったのでしょうか？ わたしたちの想像力がかきたてられます。目が不自由であることは社会的な不都合をもたらしていたからと考えるのは間違いではないでしょうけれど現代人の発想かもしれません。もっと単純に何かを見たいと彼は願っていたのかもしれませんが、それは、人々の口の上でいたナザレの人イエスを見たいという思いだったのではないのでしょうか。だから、「多くの人々が叱りつけて黙らせようと」(48節)しても、なんとしてでもイエスを見たいという願いの方が勝っていたのでしょう。

この男はイエスさまと視線を交わします。そこで見たものは、ナザレの人イエスという人物だけではなく、これからエルサレムへと上っていくのを決意し、そして数々の困難、すなわち飲まなければならない杯と受けなければならない洗礼を甘受しようとした男の顔だったのだと思います。

そして、イエスさまについていくことを決心します。新しい生き方が始まったのです。

この出来事は「道端」で起こった小さな出来事です。しかし、新たな道のりの始まりだったのです。福音書の最初にある「道端」(46節)と最後にある「道」(52節)はどちらも直訳すると「その道」となります。イエスさまが歩む「その道で」、盲人が生きて「その道で」、二人は出会い、互いにわかり合い、そして一緒に歩き始めるのです。わたしたちの人生も同じかもしれません。「その道で」イエスさまと出会わせていただき、イエスさまと共に十字架への道を歩むのです。